

資源評価調査事業

藤田 弘一・久野 正博・沖 大樹・中島 博司・山田 浩且・徳沢 秀渡*¹・瀬古 慶子*²

目 的

我が国周辺における重要漁業資源の資源量評価、動向の予測、最適管理手法の検討のために必要な基礎資料を収集するため、水産庁「資源評価調査事業実施要領」に基づく独立行政法人水産総合研究センターの「資源評価再委託調査実施要領」に沿って調査を実施する。調査結果は地先への来遊資源動向予測や資源状態の把握に資すると共に、全国的な資源量評価を行うために独立行政法人水産総合研究センターに報告する。

方 法

全国では、我が国周辺水域の42魚種82系群について資源評価が行われたが、本県が対象としたのはマイワシ太平洋系群、カタクチイワシ太平洋系群、ウルメイワシ太平洋南部系群、マサバ太平洋系群、ゴマサバ太平洋系群、マアジ太平洋系群、スルメイカ冬季発生系群、マダイ太平洋中部系群、ヒラメ太平洋中部系群、トラフグ太平洋系群、ブリ太平洋系群、マアナゴ伊勢・三河湾小型底曳網漁獲対象、シャコ伊勢・三河湾系群の13魚種13系群である。また、ブリ幼魚（モジャコ）については、漁場一斉調査として調査船による流れ藻への付随状況の調査を4月から5月に実施した。イカナゴ伊勢・三河湾系群については産卵親魚量や当歳魚加入量の推定を行うための調査を実施した。なお、マアナゴについては、多元的資源管理型漁業推進事業と併せて報告する。

1. 生物情報収集調査

県下主要水揚げ港（白子・白塚・安乗・波切・片田・和具・贄浦・奈屋浦・錦・紀伊長島・九木の11港）において、日別、漁業種類別、魚種別漁獲量を調べると共に、水揚げされた調査対象魚種について魚体測定を行い、漁獲物の生物特性を把握した。また、市場において漁獲時の漁場位置、海況などについて、聞き取りを行い、漁場別漁獲動向を把握した。シャコについては、小型底曳網漁業により漁獲され伊勢市漁協有滝支所に水揚げされた個体の生物測定を行った。また小型底びき網漁業の投

棄物を調査し、単位努力量あたりの投棄物中に含まれるシャコの混獲重量を求め、これらの個体についても生物測定した。

2. 沖合海洋観測等調査

毎月1回、伊勢湾および熊野灘の所定の定点（計12定点）において改良型ノルパックネットの鉛直曳きを行い、調査対象種の卵稚仔出現動向を把握した。また、新規加入量把握のためボンゴネット、表中層トロールネット（LCネット）、アイザックキットネット（IKMT）等による稚魚・小型魚の採集を実施した。

結 果

資源量評価並びに動向予測等については、独立行政法人水産総合研究センターによって魚種並びに系群毎にとりまとめられるため、ここでは本県が委託を受けている中から主要な魚種の本県沿岸域における本年度の漁況特性について簡潔にとりまとめる。詳細については関連報文を参照されたい。なお、調査結果に基づく魚種並びに系群毎の資源状況等については、水産庁「資源評価に関するホームページ」<http://abchan.job.affrc.go.jp>において逐次情報が更新され公開されている。

1. マイワシ

熊野灘主要港（奈屋浦・贄浦・錦・紀伊長島）における2003年度（平成15年度）の中型まき網によるマイワシの漁獲量は973トンと過去最低となった前年の948トンとほぼ同レベルであった。今期も前年と同様に冬・春季大羽群（被鱗体長19～22cm）の来遊量も少なく、夏季以降の当歳魚（被鱗体長10cm前後）の漁獲もほとんど見られなかった。全体としては少ない漁獲量であったが、まき網では10月中旬からある程度まとまった漁獲が見られ、その後11月下旬には定置網にも入網するなど、秋季から冬季にかけての漁獲が主であった。10月中旬のまき網の漁獲物は被鱗体長18～20cmの大羽に15cm前後の当歳魚が混じっていたが11月下旬には大羽群

*¹三重県尾鷲栽培漁業センター *²三重県栽培漁業センター

主体であった。11月下旬の定置網での漁獲物は15～17cmの当歳魚と18～20cmの大羽とが漁獲された。まき網では12月上旬に17～22cm（18cmモード）の大羽が若干漁獲されたがその後は漁もとぎれ、2000年、2001年など豊漁期の冬春季に漁獲されていた体長19～22cmの大羽群はほとんど漁獲されなかった。そして1月以降は被鱗体長13cmをモードとする魚体で、カタクチイワシに混獲されるにとどまった。

一方、伊勢湾でのバッチ網では、7月から12月末までの伊勢湾主要2港（白子港・白塚港）におけるマイワシ漁獲量は前年と同じく皆無であった。伊勢湾口部外域に位置する鳥羽市浦村町の港内では9月上旬頃マイワシ0歳魚が来遊し、12月頃まで養殖カキ筏周辺に滞留する現象が見られた。11月中旬における被鱗体長は約15cmであった。しかし、この群の伊勢湾内への来遊は見られなかった。

2. カタクチイワシ

熊野灘主要港（奈屋浦・贄浦・錦・紀伊長島）における2003年度（平成15年度）の中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量は11,338トンで、過去最高となった前年の13,929トンに次いで多かった。近年熊野灘では冬季の産卵親魚群（成魚大型群）が高い水準で来遊し、前年度末の1月から3月までは過去最高のレベルでの漁獲が見られた。この魚群は継続して分布し、マイワシ、マアジ、サバ類など他の漁獲対象魚が少なかった5月までは多く漁獲されていたが、その後6月に入り、ゴマサバなどがまとまって漁獲されるようになり、単価の低いカタクチイワシは漁獲されなくなり、9月には熊野灘でのカタクチイワシ魚群は逸散した。冬春季の漁獲物は被鱗体長11～14cmの成魚群が主体であった。夏季の魚体は被鱗体長11～12cmのものが主体を占めていた。その後、年が明けて1月中旬以降、カタクチイワシの漁獲は急増し、3月までまとまった漁獲が続いた。これは、12月以降サバ類やマアジ等の漁獲対象魚が少なくなり、代わりに大量に来遊したカタクチイワシの水揚げが続いたと考えられる。漁獲物はの被鱗体長は10～14cm台で12cm台にモードを持つ1歳魚であった。

伊勢湾のカタクチイワシは例年7月頃から漁獲が始まるのに対し、今期は6月に入り白子港での水揚げがあり、延べ7日間で186.7トンであった。2003年7月から12月末までの伊勢湾主要2港（白子港・白塚港）におけるカタクチイワシ漁獲量は12,120トンで、近年では1999年（16,303トン）、1996年（13,275トン）に次ぐ高水

準であった。2000年以降、夏漁は豊漁で推移するものの、秋漁は一転して不漁に終わる漁況が続いている。今期は9月に6,301トンと主要2港で漁獲統計が整備された1970年以降最高の月間水揚げ量を記録し、期間中の漁獲量の約60%が9月に集中した。10月に入り漁況は急激に低調となった。漁獲物は7～8月には被鱗体長12cm前後の成魚が漁獲主体となった。9月にはこの成魚に5～9cmの未成魚が混じった。10月には12cm前後の成魚と8～10cmの未成魚～成魚が漁獲主体となった。

3. ウルメイワシ

熊野灘主要港（奈屋浦・錦・紀伊長島）における2003年度（平成15年度）の中型まき網によるウルメイワシの漁獲量は676トンで、前年度（592トン）を若干上回り、過去最高であった2001年度（平成13年度）の1,028トンの66%であった。月別で漁獲が多かったのは10月の318トン、11月の125トンであった。2001年度以降、夏秋季の漁獲量は高い水準にあるといえる。中型まき網では10月には被鱗体長9～13cmのものと14～18cm、11月には17～20cmのものが漁獲の主体であった。

4. サバ類

熊野灘主要港（奈屋浦、贄浦、錦、紀伊長島）における2003年度（平成15年度）の中型まき網によるサバ類の漁獲量は16,650トンで前年度の14,753トンを若干上回った。尾叉長組成の推移等から判断すると、7月の漁獲の主体はゴマサバ1歳魚（2002年級群、尾叉長28～33cm）で、8月には当歳群（2003年級群、尾叉長20～26cm）も加わったが、9月以降は当歳魚は少なくなつて1歳魚主体で、今期の豊漁はゴマサバ1歳魚によるものと考えられた。11月に入り魚群は少なくなつて下旬には逸散した。マサバは4月に約196トン漁獲されたが、これは1998年4月に180トン漁獲されて以来のまとまった漁獲量であった。この漁獲の主体は3歳以上の群（尾叉長36～43cm）であった。しかし5月には約14トンと急減しその後のまとまった漁獲はなく前年に比べても低い漁獲レベルであった。奈屋浦漁港でのサバ類全体に占めるゴマサバの混獲比は2003年度漁期全体で97.7%で前年度の96.4%を若干上回った。

5. マアジ

2003年度（平成15年度）における熊野灘主要港（奈屋浦、贄浦、錦、紀伊長島）の中型まき網によるマアジの漁獲量は2,539トンで、前年度1,688トンのほぼ1.5倍

となった。この結果、1992年以降で最高の値となった2000年度の5,277トンから大きく減少した状態は2年でストップした。春季は前年同期を下回る低調な漁獲状況であったが夏秋季の順調な漁獲で前年の漁獲量を上回った。この夏秋季の中型まき網における漁獲の主体は1歳魚（尾叉長20～24cm）で定置網では当歳魚（尾叉長12～18cm）であった。7月以降はそれまでの定置網に加えてまき網漁業へも当歳群の加入が始まった。当歳魚及び1歳魚の熊野灘への来遊量は前年を上回った。

6. スルメイカ

和具港（県下最大のスルメイカ水揚げ港）における2003年5～9月の一本釣りによるスルメイカの漁獲量は116トンで、前年の130トンを若干下回った。和具港における今期の水揚げは前年と同様に例年より1月遅い6月からであった。漁期全体を通じての1日1隻あたりの漁獲量（CPUE）は158kg/隻/日で、1986年（昭和61年）以降で最高を記録した前年の222kg/隻/日より低いものの、平均値135kg/隻/日を上回った。奈屋浦での中型まき網では7月に80トンの漁獲があり、これらのことから2003年夏季の熊野灘海域におけるスル

メイカの豊度は比較的高かったものと考えられた。

7. シャコ

市場に水揚げされる個体は体長100mm前後であり、8～10月には130mm以上の個体はみられなかった。生殖腺熟度指数が高い値を示す個体は4～8月に出現するが、その出現割合が高い月は5月であった。1時間曳網あたりの混獲量は、春から夏季に向けて増加する傾向にあり、8月には約150kgに達した。これら混獲物の体長は、4～1月にかけては80mm以上にモードがみられたが、2、3月には70mm未満にモードがみられた。

関連報文

- ・我が国周辺水域の漁業資源評価、水産庁増殖推進部
- ・中央ブロック卵・稚仔、プランクトン調査研究担当者協議会研究報告No.23, 中央水産研究所
- ・長期漁海況予報（中央ブロック）No.121 123, 中央水産研究所.
- ・平成15年度漁海況予報関係事業結果報告書（漁海況データ集）、三重県科学技術振興センター水産研究部（2004）.